

令和3年度農業後継者特別支援事業

事業主体名 鹿児島県立農業大学校農学部野菜科

トマト台木の利用がなす「PC筑陽」の生育、収量等に及ぼす影響

1 目的

なすの促成栽培で定植している「PC筑陽」は冬季の低温・低日射条件下では側枝の発生や果実肥大が遅く、収量や品質が低下する傾向がある。一方、同じ促成なすの養液土耕栽培「土佐鷹」において、トマト強勢矯正台木を用いることで従来のなす台木を使用したものよりも収量が4割増加したという報告がある。そこで、同じようにトマト台木を促成なす「PC筑陽」に利用し、収量や果実品質に及ぼす影響について検討する。

2 実施状況

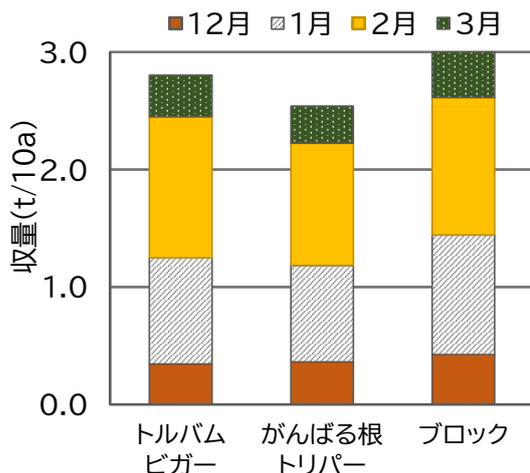
- (1) トマト台木(がんばる根トリパー、ブロック)に継いだなすPC筑陽を試験区とし、慣行品種(トルバムビガー接ぎ木)区と並べて設置した。
- (2) 11月から収穫が始まった。収穫開始時期は品種間で差は無かった。3月7日までの収量調査の結果、ブロック区の収量はトルバムビガー区よりも多かった。ブロック区やがんばる根トリパー区のA品率はトルバムビガー区よりも高かった。
- (3) 定植時から収穫開始時まで青枯れ病等の発生も無く、3月までの収量調査結果からブロック区のA品率はトルバムビガー区よりも高かったため、可販果収量の増加が予想される。
- (4) トルバムビガーは発芽にムラがあり生育が安定しないことがわかっているため、がんばる根トリパーやブロックを利用することで育苗時のコスト低減が期待できる。



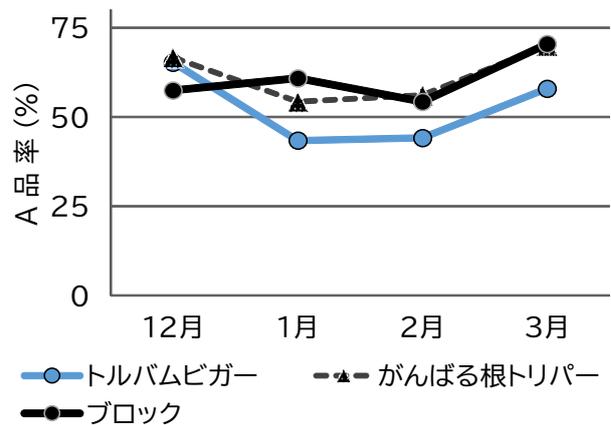
調査区の設置状況



毎月の生育調査



収量(3月7日まで)



月別A品率の推移

3 今後の課題, 取り組み

- (1) 4月以降の収穫期後半の草勢及び収量の比較
- (2) 規格外品の要因把握と対策の検討
- (3) 慣行品種トルバムビガーとのコスト比較
- (4) 収穫終了時の根域の把握